なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

コンフェクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

【Ｎコード】
Ｎ９６７０Ｕ

【作者名】
コンフェクト

【あらすじ】
僕の好きなゲームの大好きなキャラが目の前に実現化しました。これは一体、どういうことでしょう。これは神のお導きですか？いや……普段の行いが良い、僕の努力の賜物ですね！　……ごめんなさい、調子扱きました。でも、ハイテンションになるのも仕方ないじゃない。この状況、最高に嬉しいんだから！　――というわけで、これは僕と彼女の、二次元と三次元を紡ぐ物語。

出会いは突然に

きっと、人生の中で一度は思うだろう。ああ、こんな子が現実にいたらいいのに……と。

それは例えばＴＶの中で活躍するような有名女優だったり、アニメのキャラだったり。

僕の場合はそれの対象がゲームのキャラクターだ。

「ええっと……ここどこ？」

もし、自分の目の前に、『さっきまでプレイしていたＲＰＧのキャラが三次元化』されていたら……あなたはどうします？　どうしますよ？

そう、僕の目の前には女の子がいた。

四畳半のそれなりに汚い部屋の真ん中にぽつんと、お尻と両手を下につけたポーズで。

白磁を思い起こさせるきめ細やかな肌と、徹底的に美と可愛さと萌えを追究させたようなスッとした顔立ち。その顔についた大きな蒼い目をぱちくりさせている。

銀色と水色の中間を表現したような流麗なロングヘアー。黒い布服の上に羽織る形で純白のローブに身を包んだその姿はまさにファンタジーのキャラそのものだ。

「――――あ」

辺りを見回した彼女は部屋の中で佇んでいた僕と目が合う。

僕はというと、震えていた。

それは恐れから来る物ではなく、ましてや体調不良などから来る震えでもなく。

ただ純粋に、僕は感動していたのだ。感動に打ち震えていたのだ。

「く、く、くくく」

「く？」

自然と口から漏れ出ていた僕の声を拾うように、目前の美少女が口を開く。

「く、クレアたぁぁぁぁん！」

「ぅ、うわぁっ！？　きゃぁぁあっ！？」

僕は目の前の美少女に飛びついて抱き付いた！

そしてそのまま腰に手を回し、彼女の顔に自分の顔を近づけ、強引に唇を――――

が、彼女の右手から繰り出された高速の右ストレートが僕の顔面を捉え、そのまま意識はどこかに飛んだ。

彼女は暴力的

どうやら僕は気絶していたらしい。顔の表面が焼けたようにヒリヒリする。

目を開けた僕に最初に飛び込んできた映像は見目麗しい美少女だった。

心配した顔で僕を見つめている。

ああ、よく見るとクレアたんじゃないかぁ。僕の好きなゲーム、『レイド・オン・サタン』に出てくる美少女武闘家。

ということは、これは夢か。まさか夢にクレアたんが出て来てくれるとは。今まで何度見ようと思っても出て来てくれなかったのに、初めての経験だ。

よし、このまま夢の中で彼女とくんずほぐれつ――

「あ、起きた？」

風鈴が鳴るように美しい声が響いた。

やけにリアルだ。まるで本当に目の前にクレアたんが居るように――

「って、本当に居るし！」

僕は歓喜の声を上げて体を起こした。そうだ、さっき突然僕の部屋に現れて、僕は殴られて。

……ということは、これは現実じゃないか！　目の前にいるのは本物のクレアたん！　マジですか！？

「あの、とにかく状況を説明しなさいよね。ここはどこなのよ。そしてあなたは誰？」

クレアたんは困り顔で溜息を吐き、僕に問いかけた。
僕は興奮冷めやらずまま、自分が高校生男子であること、ここが日本であること、クレアたんがゲームのキャラであることを簡素に語った。
彼女は終始困惑の表情である。よくわからないことが多いのだろう、当たり前か。僕も興奮と困惑が入り交じって訳のわからない状態だ。

「牧場泰三＞＞マキバタイゾウ＜＜……タイゾーね」
「っっっ！」

クレアたんが僕の名前を読み上げた。すごい、名前を呼ばれているよ、僕。クレアたんに名前を呼ばれているよ。
僕の顔はきっと赤くなっていることだろう。浅名詩織ボイス（クレアたんの声優さん）だよ！？　その透き通るような繊細な声で今、僕自身の名前が呼ばれている！　これだけでご飯十杯はいける！

「な、なんでそんな恍惚の表情を……。あ、あたしも自己紹介しないとね。あたしの名前は――」
「クレア・リフィール、十七歳。身長百六十三センチの体重は四十八キログラム。スリムな体型だけど出るところは出てる僕好みの体型！　好きな食べ物はプロフィールだけで聞くと太った人間であるという印象を抱かれやすいピザ！　特にチーズとトマトをふんだんに使った物が好み！　血液型はＡＢ型で、特技は硬貨を指で曲げること。　スリーサイズは上から八十二、ごじゅうきゅ」

刹那、饒舌にクレアたんのプロフィールを語っていた僕の輪郭間際を凄まじい風圧が駆け抜けた。その原因は彼女の空を切る拳によるもの。

ていうか僕の判断があと一歩遅かったらまともに食らっていた。

「あ、あっぶな！　また気絶したらどうするの！」

「その方があたしにとって最良の結果だと思うわよ！」

クレアたんのつり上がった瞳が僕を真っ直ぐに睨み付けている。高校二年生にしては童顔だと言われる僕の顔が潰れてしまうじゃないか。

クレアたんに殴られるのは嬉しくもあるけど、もう少しだけ手加減してもらいたい。

「っていうか、あんたって危険人物でしょ！　紛れもなく！　さっきもいきなりあたしに抱き付いてきたし！」

「失礼な！　僕は至って安全だよ！　三度の飯よりクレアたんが好きなだけの存在だよ！」

「あんたの中での安全の基準が知りたいわよ！」

彼女は徹底的に僕に敵意の目を向けていた。隙あらば殴られそうだ。

仕方ない、いきなりこうして僕の前に現れたのだから、戸惑いでいっぱいだろう。僕自身もこの状況には心底びっくりなのだから。

と、とりあえず、彼女に現状を理解してもらわないと。

がんばれぼく

「つまり、あたしはこれの中に出てくる登場人物ってことね」

クレアたんはゲームの入っていた箱を見つめながら呟く。

このゲームはパソコンゲームである。ジャンルはＲＰＧ。

戦士、武闘家、魔法使い等の職業の中から一つを選び、その職種の人間が広大な世界を旅して魔王を倒すという単純明快なゲームだ。

ちなみに仲間はおらず、ずっと最初から最後までキャラクターは一人で戦い抜かないといけない。

「うん。ほら、箱にも描かれてるし、説明書にも載ってるでしょ？」

「本当だ……」

クレアたんは納得出来なさそうな顔で眉を潜めている。自分が異世界にやってきたという現実を直視出来ないみたいだ。

二次元から三次元。にわかには信じがたい転移である。

「はぁ、なんでこんなことになったのか……わけがわからないわ」

クレアたんは右手で頭を抑えて嘆く。

凛々しい姿も良いけど、悩みに悩むクレアたんの表情もたまらなくいいなぁ。

「いや、でも理由にはちょっとだけ心当たりがあるよ」

「へぇ？　聞かせなさいよ」

僕はドヤ顔で告げることにした。

「毎日毎日、片時も忘れずに『クレアたんと恋人同士になれますように』って願ってたからだと思うよ！」
「そんなのが理由になるかぁっ！」

クレアたんの右腕が、今までにない最高レベルの勢いで僕の顔めがけて飛来した。
今の威力は恐らく、作中に登場するモンスターであってもノックアウトするレベルだ。
先ほどの経験が無ければ、たぶんまともに食らっていた。

「く、クレアたん、照れ隠しだからって、その攻撃は僕が死んじゃうよ」
「どんだけポジティブなのよあんたは！　照れ隠しじゃないし！　微塵もその気無いから！」
「えっ……嘘でしょ……？」
「なんでこの世の終わりみたいな顔してんのよ！」

僕は思案する。もしかして……クレアたんはあまり友好的じゃないのか？
『好き好き大好き、タイゾーくん』て感じじゃあ……、ないのか？　ないのか？
ていうかもとよりクレアたんは人に好意をストレートに表現するタイプではない。どちらかというとツンデレ系だ。
だから普段は暴力的な感じが続くんだろう。言葉にもトゲが多い。
僕に危険が振りまかれることは多い。

「だがそれがいい！」
「……」

ニヤリと微笑む僕。

見るとクレアたんは汚物を見るような眼差しを向けていた。顔も呆れている様子だ。

「く、クレアたん？　怒っちゃった？」
「通り越したわよ。はぁ、もういいわ。……てか、その『たん』ってのは何なのよ。呼び捨てでいいわよ」

クレアたんから呼称の許可を頂いた。呼び捨てでいいらしい。
……呼び捨て……だと……？

「ククククレレレ、レ、レ」

クレアたんを呼び捨てで呼ぼうと頑張る僕。
声は震え、肩は竦み、全身が悲鳴を上げる。
頑張れ、頑張れ、あと、もうちょっ――――

「うわぁぁぁ！　恥ずかしくて言えないよ！」
「なんで！？」

クレアたんが白目で驚く。僕はあまりの恥ずかしさに悶えていた。
クレアたんを呼び捨てで呼ぶなんて……思いっきり意識してしまう。
そんなこと、僕には耐えられない。恐れ多すぎて、嬉しすぎてっ！

「そ、その、やっぱり『クレアたん』のままがいいよ！　クレアたんを呼び捨てで呼ぶなんて、脳みそがとろけそうだよっ！」
「あんたプロフィール語ってたとき呼び捨てだったわよねぇ！？」

僕は沸騰する脳内をなんとか抑えようと必死で転げ回る。クレア

たんは転げ回る僕を見て『エライところにきてしまった』と言いたげな顔をしていたが今はどうでも良かった。
クレアたんがやってきたのだ。これで僕の一生の幸せは確保されたようなもの――

「お兄ちゃ――――」

そのとき僕の部屋のドアが開いた。
そこには、僕の妹のミヨが立っていた。

妹、登場

僕の妹である牧場御代（まきば みよ）はドアを半開きにしながら固まっていた。理由は単純明快。彼女の視線は思いっきりクレアたんに釘付けだった。

「お、お兄ちゃんが……」

わなわなと体を震わせるミヨ。その顔は驚きを隠せていなかった。ミヨは中学三年生である。背丈は平均のそれより小さく、頭の高い位置に短いツインテール。灰色のスウェット上下に身を包んでいた。

「モテなさすぎるからって、ついにコスプレイヤーのデリ〇ルを呼んだぁー！」

「お、おい待て妹よ！」

叫びながら全力で走り去ろうとする妹を咄嗟に引き留め、その場に立ち止まらせる。

どうやら妹はむちゃくちゃ誤解している模様だった。

「お兄ちゃんがそんな不純なことをするわけがないだろう！」

「ゲームの女の子が好きな時点でもう不純だよ！」

よくわかっていらっしゃる妹だった。……じゃなくて！

「別の発想は無いのか。もしかしたら、彼女、とかかもしれんだろ

う」
「そんなのお兄ちゃんに出来るわけ無いよ！」
「うっ……」

ミヨの言葉は大きな釘となり、僕の心臓に突き刺さった。く、悔しくなんかないもんねっ！
っていうかなんでデリ〇ルなんて単語を知っているのか謎だ。最近の若者は学習が早くて怖い。

「じゃあ、なんなの、あの人。お兄ちゃんの愛してるキャラみたいだったけど」
「それがな、聞いて驚くなよ、ミヨ。なんと本物のクレアたんがウチにやって来てくれたんだ！」

興奮して声が高鳴る僕。それを聞いたミヨの目の色がすぅっと消えていく。

「……お兄ちゃん、そんなに生きることが辛かったんだね。受け止めようよ、現実を。確かに嫌なこともいっぱいあるかも知れないけれど、その分良いことだって、たくさん、あるよ。お兄ちゃんが何か悩んでるんだったら私が聞くし、出来ることだったら助けたり力になるよ？　だからあまり一人で悩んだり思い込んだりしないで、私に助けを求めてね、お兄ちゃん」

まるで鬱病患者を慰める際に見せるような顔をする妹だった。完全にイッちゃってる人扱いされていた。
そんなミヨに僕は事のあらましを語ることにした。ゲームを終えたら傍にクレアたんがいたこと。僕のテンションがマックスなこと。
始めは信じていなかったミヨも、僕の力説に嘘はないと感じたの

か、どうにか状況を説明することが出来た。

「ゲームの中から、出て来ちゃったってこと……だよね？」
「うん、その通りだな」
「それで、お兄ちゃんはどうするの？」

どうしよう。クレアたんが来てくれて舞い上がっていたものの、よく考えるとこの先、どうしよう。
大好きなクレアたんが来てくれた訳だけど、なんか問題も多い気がする。
この世に存在しない人がやってきた。言葉にすると簡単だけど事態は深刻な気がしないでもない。
まぁ、僕は幸せだから無問題なんだけどね。

「ゲームの中に、送り返せないの？」
「そんな通販の返品のように言われてもなぁ。……どうやって？」
「……」

妹が腕を組んで悩んでいた。数刻考えた後、ハッと閃いたように顔を上げる。

「パソコンの画面に、ぶっこむ」
「随分と抽象的だな、おい」
「だってそれしか考えられないよ！」

むーとむくれる妹。まあ僕も案は出てないわけだけど。
そういえばクレアたんが出て来たのは画面の中からじゃないはずだ。僕はずっとモニターに対面していたし。
ゲームを終えて、気づいたらそこにいた、という感じだった。

「と、とにかく私も会ってみるよ、クレアさんに」
「んじゃ、行こうか」
ここであーだこーだと話していても埒があかない。
僕達はクレアたんの待っている、僕の部屋に戻るのだった。

妹、絡む

「じー……」
「じー……」

「……あの、あんたたち何やってるわけ？」

僕とミヨは扉の縁からそれぞれちょこんと顔を出し、クレアたんを舐めるように見つめていた。

「その子は？」
「あ、ええと。私、お兄ちゃんの妹で……牧場御代って言います。よろしくお願いします」

誰なのかと尋ねるクレアたん。それに対しミヨはいたく丁寧に切り返していた。
その礼儀正しい姿勢に感銘を受けたのか、クレアたんはニッコリと笑いながら応対する。
あれ、なんか僕の時と大分、対応に違いが見られるような気がするんだけど。

「なんでも、ゲームの世界からやってきたそうですね？」
「ええと……そうなるのかな。信じたくはないけれど……」

ミヨが質問をする。溜息を吐きながらも、クレアたんは現状を受け止めている模様だった。
クレアたんの話によると、冒険の最中に気づいたらここに来ていたらしい。
その最中というのが、僕が先ほどまでゲームをプレイしていた部

分と同じであったため、どうやらゲームの中から抜け出てきたのは間違いないようである。

「やっぱり、僕の愛が起こした奇跡に違いないね！」
「ねぇ、ミヨちゃん。あなたのお兄ちゃんていつもこうなの？」
「はい。クレアさんにぞっこんの、現実と妄想の区別がつかない変態野郎です」

高らかに喋る僕。なんだか妹とクレアたんから冷たい目線が飛んでいるような気がするけれども、気にしない。

「でも、お兄ちゃんがこうなっちゃったのにも訳があって……。お兄ちゃんは前、女の子に酷い振られ方したんです。その頃のお兄ちゃんはすごく病んでて……どうしたらいいんだろうと思っていた私は、誕生日にゲームソフトをプレゼントしたんですけど。そしたらそのゲームに出てくる一人の女の子――――つまり、クレアさんに大はまりしちゃって。それからです、お兄ちゃんが現実の女の子を見なくなったのは」

淡々と語る妹にクレアたんはなるほどと相槌を打っていた。
ああ、そういえばそんなこともあったな。しかし僕は今、クレアたんというパラダイスを手に入れているから無問題だ。

「――ッ、そ、そうだ！　よく考えたらクレアさんが全部悪いんだ！　クレアさんなんてキャラがいるせいでお兄ちゃんは二次元の女の子を愛する体質に……許さないよ！」
「え。ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　それは逆恨みって奴でしょうよ！？　私に悪いところ何も無いじゃない！」
「クレアさんが魅力的なのが悪いんだよ！」
「あたしにどうしろってのよ！？」

「お、おいおい。二人ともその、落ち着いて……」

なんか二人が険悪なムードになっていた。さっきまですごい和やかな雰囲気だったのに。

「あんまりふざけたこと言ってると、女の子であろうと容赦しないわよ？」

クレアたんが物凄い形相で拳の骨をぼきぼきと鳴らしていた。

その様子にミヨは一瞬だけ身をこわばらせるも、ふっと得意な顔でクレアたんを見据えた。

「ふっふん、いいのかな？」

「な、何がよ」

「もし、ここで私が大声を出してみたりしたら、どうなるかな？人がすっ飛んでくるよ。そしてクレアさんはこの世の人間じゃない、謎の、未知の人間だよ？　そんな人がおおっぴらに暴れたりしたら、どうなるかなぁ。クレアさんはこの世界じゃ戸籍も何もないわけだから、保証も何も無いし、奇異の目に晒されるよ。そして挙げ句の果てには学会の研究所へ……ふふふ」

「う、うぅぅ……」

お、おお。なんか腕力では圧倒的に負けてるはずの我が妹が押しているぞ。

「どうしろってのよ……。あたしには魔王を倒すっていう使命があるんだから、あなたたちには構ってられないの。早くゲームの中とやらに戻してよ」

「そうだよ、お兄ちゃん。早く送り返そうよ。お兄ちゃんの衛生上も良くないよ」

ミヨとクレアたんの意見が一致していた。どうやら、クレアたんを早急に戻さないといけないみたいである。舞い上がっていた僕の心は見事に打ち砕かれた。

いや、でもせっかく来てくれたのだし、ううむ。

「同居って形は……ダメ？」

『ダメ』

ミヨとクレアたんの声がシンクロした。僕の意見はまるで通りませんでした。

出たり入ったり

「なあ、ミヨ。馬鹿なことを聞くかも知れないけど……」
「うん、お兄ちゃん」
「クレアたんは、どこに行った？」
ゲームを起動した途端、クレアたんがどこかに消えた。
僕はクレアたんがどんなゲームから飛び出してきたのかを教えようと、パソコンの前に座って『レイド・オン・サタン』を起動し、セーブデータをロードした直後――――気づくと隣で見守っていたクレアたんが消えたのである。
僕とミヨは辺りをぐるぐると見回すが、どこにもクレアたんの姿は無く、ごく普通の僕の部屋であるだけだった。
「ゲームの中に戻っちゃったんじゃない？　それかもう夢だよ、私達は夢を見てたんだよ」
「いや、そんなわけあるはずないよ。だってこの顔の痛みがすごくリアルなんだ。さっきクレアたんに殴られたという事実が、本物である証拠だよ」
「悲しい現実の見据え方だね……」
僕にはしっかりとクレアたんにぶん殴られた記憶と痛みがある。転んで打った訳でもないし、電柱に顔をぶつけたとかいうオチでもない。
一体、クレアたんはどこに消えてしまったのか。僕とミヨは顔を見合わせる。

そして二人してパソコンの画面に目を吸い寄せる。
画面の中には３Ｄで表示されたクレアたんが居た。広大な野原に丘がぽつぽつと点在するフィールド。その中にクレアたんは立っている。
周りには少数のモンスターがうろついていた。主にスライムのような軟体性の敵や小型の鳥の敵。
要するにワールドマップという奴だ。

「それに、僕とミヨが同時に夢だか幻覚だかを見るって、ありえなくね？」
「まあそれはそうだね」

謎は深まるばかりだった。とりあえず僕とミヨは部屋の中を捜索することにした。
押し入れのフスマを開けて中を覗いたりしてみるが、やっぱりクレアたんの姿はない。

「ゴミ箱の中にもいないよー、お兄ちゃん」
「お前探す気無いだろ！？」

妹のやる気がゼロだった。縦二十センチ程度のゴミ箱にクレアたんが入るものか。
僕は思案する。一体、彼女は何処へ。消えたのは、ゲームを始めてロードをした時辺り。現れたのは、ゲームを終えたとき。
そこから導き出される答えは――――

「まさか」

僕はもう一度パソコンの前に座り、ゲームのコントローラーを手に取った。

適当にその場でセーブをして保存し、ゲーム自体を終了させる。
そして僕とミヨは部屋の中をぐるりと見渡す。

『あ』

僕とミヨは二人して間の抜けた声を上げていた。
見てみると部屋の真ん中にちょこんと、正座して座っているクレアたんがいた。
目をぱちぱち開閉しながら、きょとんと佇んでいる。現状に認識が追いついていない、という様子だった。
クレアたんが、クレアたんが、戻ってきた。

「く、クレアたぁぁぁぁん！」
「せいっ」
「オウフッ！」

クレアたんは真顔で正拳突きを繰り出し、僕のボディーへとめりこんだ。
飛びかかった僕はその場で膝を付き、お腹の激痛に身を悶えながらその場に沈み込んだ。
大変痛い。けれどもクレアたんが戻ってきたという事実の嬉しさの方が勝っていた。

「あ、あれ？　クレアさん、戻ってきたの？」
「……そうみたい」

彼女曰く、元の世界（ＲＰＧの中）に戻って安心し、さぁ冒険の続きをするぞというところで気づくとこっちに来ていたらしい。
やっぱりそうだった。要するにクレアたんはゲームをやめると、こっちに来る。ゲームを始めると、消える。

つまりゲームをプレイしている間は向こうで生きていることになる、ということなのだろう。

「要するに、あたしってタイゾーの掌の上……？」

「そういうことになるね」

クレアたんはその事実を知ると、頭を抱えて唸りだした。

感動しているんだろう。これからは僕の意志でクレアたんを召還したり出来るわけで、いつでも会えるということ。

「僕は今最高に嬉しい気分だよ！」

「あたしは最高に泣きたい気分よ！」

僕の夢は広がりまくっていた。

「あ、クレアたんのセーブデータをいっぱい作ったら、ハーレム状態に出来ないかな……」

「ならないと思うよ、お兄ちゃん……」

家族の絆

「というわけで、こちらがゲームの中から飛び出してきちゃったクレアたん」
「あらまあ」

クレアたんを紹介することにした。
うちはお父さんが海外勤務のため家にはいない。そのため手始めにお母さんに紹介することとする。
ゲームのキャラだと聞いて少しばかり面食らっていたお母さんだけども、大して驚く素振りはなさそうである。

「えっと、クレアです。よろしくお願いします」
「はーい。仲良くしてくださいね」

大きく微笑むお母さん。元々細い目がより一層細くなる。
天然パーマが掛かっているんじゃないかというふわふわとした長髪。
癒し系という表現が正しいゆるふわ系の母親である。

「お、お母さん？　驚かないの？　変だと思わないの？　お兄ちゃんのゲームから出て来たって、言ってるんだよ？」

ミヨは信じられないといった様子で語りかける。
異次元からのお客様が来たという事実にお母さんはまるで動じる姿勢を見せず。

「えっと……それが、どうして驚くことになるのかしら？」

何が問題？　という感じで首をかしげるのだった。

「いいかしら、みーちゃん」

みーちゃんというのはお母さんがミヨを呼ぶ際の呼称だ。

お母さんは腰をかがめて目線の高さをミヨに合わせると、真面目な口調で言葉を発する。

「この世にはね、超常現象がありふれているのよ。有名な物だと神隠しっていうのがあってね。現世と別の世界があると仮定して、時空の歪みに人間が取り込まれたりする可能性が示唆されているの。科学が進歩したとはいえ、世界に広がる様々な謎は未だに解明出来ていないものなのよ。だから――――」

お母さんはより一層真面目な顔つきでミヨを見つめて言う。

「つまり、ゲームからいきなり人が飛び出しても――――――まるで不思議なことではないのよ」

「いや、思いっきり不思議だよ！」

ミヨは冷静な意見で反論していた。

そこで頭を縦に振るような人が悪徳商法に騙されるのだろうな、と僕は内心思った。

「それにしても泰三、羨ましいわね。まさかゲームのキャラクターがこっちに来るなんて……。お母さんもね、昔に流行っていた漫画のキャラクターが好きで好きで。出てこないかなって、何度も思ったものよ。」

お母さんは昔を懐かしむように語り出す。

頬に掌を当てて心なしか惚気ているように見える。

「そう、アンドゥレ様が出てこなかったから……私はお父さんと仕方なく結婚しちゃったのよ」

仕方なく結婚すんなし。

クレアたんとミヨは「この親にしてこの子ありだー！！」と言いたげな顔をしていた。

■

お母さんの好意でクレアたんに料理を振る舞うことになった。

僕がクレアたんはピザが大好物だよと言うと、「こっちの世界にもピザがあるんだ」とクレアたんは喜んでいた。

木造テーブルの四席に僕とクレアたんが向かい合い、僕の隣にミヨ。ミヨの対面にお母さんという布陣だ。

「前にピザ作り教室でちょっとだけ習ったことがあるんだけど、上手く出来ていなかったらごめんなさいね」

「いえ、すごく美味しいです！」

クレアたんは上機嫌でピザを口に運んでいた。嬉々としたクレアたんの顔がたまらなくかわいい。

とろりと溶けたチーズがたっぷりとパン生地に乗っており、アクセントを加えるように刻まれたトマトがちりばめられている。

ゲームの世界から来た彼女だけど、こっちの世界でも食事は出来るようだ。

「そういえば、ミヨ」
「ん？　何、お兄ちゃん」
「ＲＰＧの世界ってトイレとか見かけないけど、クレアたんてウ○コするのかな？」
「知らないよ！」

僕は真面目な疑問を隣にいたミヨにぶつけたのだけど、一蹴されてしまった。小声だったのでクレアたんとお母さんには聞かれていない。
それ以上そのことについて考えたら本気でセクハラ、変態だとミヨが言うので僕は渋々とその疑問を頭から遠ざけた。

「賑やかそうな家庭ですね」
「そうね、うちはお父さんが遠くに出ているけれど、大きな家庭問題も無いし、安泰ね。クレアちゃんの家族はどんな感じなのかしら？」

お母さんは何気ない質問をクレアたんに投げる。
僕は一瞬、その質問は止した方がいいと感じたが、クレアたんが特に気負っている風でもなく語り始めた。

「両親は、他界しています。後は弟が居るんですけれど、弟はその……姿を消してしまって、失踪中なんです」
「あ……」

少しだけ顔に陰りを浮かべて話すクレアたん。
その内容にお母さんはごめんなさいと頭を下げるが、いえいえと

クレアたんは顔を上げて気にするでもなく話を続ける。

「魔王を倒せば、王国軍の方々に探してもらえることになっているんです。魔王を倒す旅、そして弟を捜し出す旅でもあるんです。本当は、弟を捜すことが目的で、魔王を倒すのは二の次……って言ったら、あれなんですけど」

クレアたんは自由都市クロテアという街で弟と二人暮らしだったという過去がある。

突如失踪してしまった弟リックを探すため、そして魔王を倒すという目的がクレアたんのストーリーであるのだ。

「あたし、急にすごい力を手に入れたんです。それこそ、モンスターを次々に倒していけるような大きな力を。そしたら何故だか私の頭の中に聞こえてきたんです、『マオウヲ、タオシテ』って。神様のお告げなのかも知れません」

そう、クレアたんはある日、強大な力を手に入れたのだ。

クレアたんは元々武道を習っていて強かったのだけれど、それでも女性である彼女に強さを求めるのには限界がある。

そんなクレアたんはある時、信じられない強さを手に入れる。大の男であろうと容赦なくぶちのめし、凶悪なモンスターであろうと薙ぎ倒す常識を逸した能力を。

「だから、あたしは絶対に弟を見つけて、魔王を倒すんです。そのためにはこの変た……タイゾーくんの力が必要になるわけです」

クレアたんはぐっと拳を握りしめて言う。そう、ゲームのキャラクターである彼女が、目的を成し遂げるにはプレイヤーである僕の力が必要不可欠となるわけだ。

「なら、きっと問題ないよ」

ミヨが満面の笑みを浮かべて喋っていた。

「お兄ちゃんはクレアさんを動かすことにおいては一流だと思うし。一度ゲームをクリアしたこともあるみたいだし、クレアさんの目的は絶対に達成出来るよ！」

ミヨの心強い一言で、談笑するクレアたん達。

その中で一人だけ、僕は心の底から笑えていなかった。顔がひきつっていたかもしれない。

血の気が引く、というのはこういう感覚なのか。もしくは背筋が凍り付くという感覚か。

クレアたんはゲームのキャラクターであり、その生き様はゲームのストーリー。

それを動かすのは僕。彼女の行き先を決めるのは、僕自身。

それらを踏まえて全てを考えたとき……僕は彼女がやってきたという現状の側面を、思い知ることになるのだった。

諦めなければ終わりじゃない

本来は薄暗く、常人では何も見えない闇の空間――そんな洞窟の奥地も、私の今の目ならば見渡せる。
ごつごつとした岩肌に囲まれた駄々広い空間に私はいる。
レンドット山。魔王が住むと言われる根城に辿り着くためにはこの山内を通過しなくてはいけない。
本来ならば楽に越えられるはず……なのだけれど。

「くく、これはこれは美味しそうな女がやってきたぞなもし」

私の目の前には魔物が佇んでいた。
人型に近い魔物で大きさとしては大の男、と言ったところである。
しかし、両腕の肘から先が“植物”のようになっていた。
ツルのような長い一本の触手からは無数の鋭く伸びた棘が生えており、恐らくあの腕を使って雁字搦めにした人間を襲うのだろう。
現に、口は人間のそれではない。
明らかに吸引を目的とした形状だった。捕まえた人間をあの針のような口で突き刺し、一心不乱に体液を啜り取るのだろう。
こいつはレンドット山の山間を通過するために掘られていた洞窟の中心を根城にし、通行人の人々を襲っていたのだという。
おかげで周りにはつい先日まで体温が通っていたのであろう、力尽きて血に伏せている人達が幾人も在る。
その中には既に骨と化し、生前が男女のどちらであったのかすら判らなくなっている物も居る。
そんな酷い光景を見ても、大して心身が揺らがない今の私は果たして正常なのだろうか。
数多の魔物を倒してきたせいで、感覚が麻痺しているのかも知れない。

いや、でもきっとこれは推測だけど――――あの魔物に同情したからというのもあると思う。
あいつはきっと、悪いことはしていない。
自分の主食がただ、『人間であった』という事実が、私達人類にとって耐え難い不快な存在であっただけ。
裏を返せば、私もきっとやっていることは同じなのではないだろうか？

「残念だけど、あたしはあなたに食べてやられる気はないわ。あなたを倒して、この先に行く。あたしには目的があるから」
私は強い意志を秘めた瞳で魔物を睨むと、魔物は両腕を大きく広げ、けらけらと笑い出す。
うねうねと蠢く両腕のツルが嫌に不快だ。

「そうかい、そうかい。しかぁし、お前がどうあがこうと俺の双腕からは逃れられないんだなもし。覚悟するんだな」

どうあっても私を食べたいらしい。
食うか食われるかの状況であるのに、私は酷く落ち着いている。恐怖という概念が姿を見せない。今の私ならば何でも出来るのだという自信に満ちている。
その理由には、タイゾーの存在も大きいのかも知れない。……認めたくないけれども。

「うらぁっ！」

魔物が私に向けて大きく右腕を振るう。
鞭のように迫る奴の触手を私はしゃがんで回避する。それを見た魔物は続けざまに左腕で大きく振りかぶってくるが、私はその攻撃

も難無く横に移動することで避ける。
　あの攻撃は受けない方がいいだろう。何より棘のダメージが痛そうだし、そのまま絡みつかれて捉えられる恐れがある。
　つまり、私に与えられた戦法は絶対回避。

「――足がガラ空きだっての！」

　隙を見て私は大きく距離を詰める。と同時に魔物の足に回し蹴りをヒットさせた。
　奴の足は腕と違って大きく発達しているわけではなく、細い。
　そんな脆い箇所に打撃を食らったおかげで魔物は体制を崩してその場に倒れ込んだ。

「ぐあっ！」

　魔物は大きく後ろに倒れ込んだ。その影響で洞窟の地面に頭を打ちつける。
　その瞬間を私は見逃さずに近づく。
　状況判断が遅れている今がチャンスだ。たたみ掛けるのならば、相手が崩れているこの一瞬が好機。
　私は右腕を水平に手元に引き、倒れ込んだ魔物のお腹に一直線にめり込ませてやった。

「うがあああっ！」

　洞窟内に木霊するように絶叫が響く。効いている。与えたダメージは大きいものだ。
　よし、このまま意識を失うまで殴りに殴ってやるるる

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる

★☆タイゾーくんの視点☆★

「ああっ、パソコンがフリーズしたっ！？」

なんたることだ。
せっかくレンドット山の奥地にまで辿り着いて、ボスを撃破できるところだったのに！
僕は机に座り、パソコンの前で項垂れていた。
このダンジョンはセーブポイントが無いから地味に痛い。また洞窟の手前からやり直しかよ……
にしても、ついていない。この洞窟、ボスのところに辿り着くまで最速でも二十分近く掛かるのに……

「きゃあっ！」

クレアたんが部屋の一角にどさっと音を立てて落ちた。
いきなりパソコンが止まったものだから強制的にゲームの中から外に投げ出されたのだろう。ごめんね、クレアたん。

「クレアたんの驚いた時の声……可愛いぃぃ痛てててて！」
「う、うるさいっ」

クレアたんが僕の顔を抓る。
頬を染めて悔しそうな顔をしていた。こ、これはデレ顔だ！　これは勝てる！　別に何に、ってわけじゃないけども！
クレアたんが僕の前で顔を赤くするなんて初めての出来事だったもんだから無性に嬉しい。
何がどうなったのかをクレアたんに説明すると、彼女はとても残念そうな顔をしていた。

「あぁ、後ちょっとで勝てたのになー」
「あれ、クレアたん、記憶あるの？」
「ん？　あるわよ。ちゃんと殴った感触もあるし」

プレイ途中でぶつ切りになったクレアたんだけど、消える直前までの記憶がどうやらあるようだ。
ということはもしかしたらセーブしておいていくらか進めた後にロードをするとそこまでの記憶が残っているのかも……なんてことが頭に考えられたけれども、今回の場合は意図的に行ったわけじゃないし、なんとなく試すのが怖いのでやりたくない。

「さ、もう一度やるわよ。タイゾー」
「え、またやるの？　今日はもう冒険はやめて、お茶にしない？」
「ダメよ。なんかキリが悪いじゃない。あいつを倒すまではやめない！」

案外クレアたんは頑固であった。まぁ、そんな彼女の我が儘にも付き合っちゃうのが僕である。
僕はフリーズしたパソコンを再起動し、レイド・オン・サタンのアイコンをダブルクリックして起動。
再度クレアたんの冒険が始まった。

■

本来は薄暗く、常人では何も見えない闇の空間――そんな洞窟の奥地も、私の今の目ならば見渡せる。
ごつごつとした岩肌に囲まれた駄々広い空間に私はいる。
レンドット山。魔王が住むと言われる根城に辿り着くためにはこの山内を通過しなくてはいけない。
本来ならば楽に越えられるはず……なのだけれど。
……っていうか、一回考えたことを何で考えてるかな。

「くく、これはこれは美味しそうな女がやってきたぞなもし」

私の目の前には魔物が佇んでいた。っていうか、ぞなもしって何よ。どこの言葉。魔物の間で流行ってるの？
人型に近い魔物で大きさとしては大の男、と言ったところである。
しかし、両腕の肘から先がツルのようになっているのでそれを駆使して頑張る生物だと思う。
口はハッキリ言ってグロい。あの口にだけは弄ばれたくない。
こいつはレンドット山の山間を通過するために掘られていた洞窟の中心を根城にし、通行人の人々を襲っていたのだという。
おかげで周りにはつい先日まで体温が通っていたのであろう、力尽きて血に伏せている人達が幾人も在る。
その中には既に骨と化し、生前が男女のどちらであったのかすら判らなくなっている物も居る。
そんな酷い光景を見ても、大して心身が揺らがない今の私は果たして正常なのだろうか。
数多の魔物を倒してきたせいで、感覚が麻痺しているのかも知れ

ない。
いや、でもきっとこれは推測だけど――――あの魔物に同情したからというのもあると思う。
あいつはきっと、悪いことはしていない。
自分の主食がただ、『人間であった』という事実が、私達人類にとって耐え難い不快な存在であっただけ。
裏を返せば、私もきっとやっていることは同じなのではないだろうか？
……考え直すと、大分ポエマーぶった思考をしているなぁ、私。
相手の心を読む魔物とか居たら、やだなぁ。

「残念だけど、あたしはあなたに食べてやられる気はないわ。あなたを倒して、この先に行く。あたしには目的があるから」
なんか私、さっきと同じ事言った！　別のこと言おうとしたのに出来なかった！

「そうかい、そうかい。しかぁし、お前がどうあがこうと俺の双腕からは『致命的なエラーが発生したため、＜レイド・オン・サタン＞を強制終了します』

★☆タイゾーくんの視点☆★

強制終了。それはどう考えても得する人の方が少なそうな単語。
坦々と、僕の時間を奪っていった。
クレアたん、ごめんよ。せっかくまたボスのところに着いたとい

うのに、原因不明のエラーで処理落ちしたよ。
なんなんだろうね、一体。僕が何をしたというの。

「げぷっ」

唐突に現れたクレアたんが地に伏せた。なんか変な声が出てる。
そんなクレアたんに僕は急いで駆け寄り、「今度は何よ！」という彼女に事情を説明。
酷く納得のいかない表情をしていた。

「今度は戦う前に終わったわよ！？」
「今日はどうやら厄日みたいだね……。しょうがない、続きはまた今度に……」
「いや、やるわよ」
「えっ？」

クレアたんは諦めてなかった。情熱とやる気に満ちあふれていた。何がなんでもあのボスを今、倒したいらしい。
確かに僕にも諦めきれないっていう時はある。こうなると意地だ。
今回はダメージの負ってないクレアたんが出て来たから良かったものの、ダメージ負ってる状態でゲームが途切れたら、血塗れのクレアたんとか出てこないよね？
このゲームは基本的にセーブする時は回復ポイントと一体化なので、強制終了とか無い限りはクレアたんは体力が満タンの状態で出てくるはずなのでそこら辺は安心だ。
それにクレアたんにダメージなんて、出来る限り、何が何でも僕が与えさせない。

僕との些細な雑談の後、クレアたんは再びゲームの中へと足を進ませた。

■

私は力をもらったおかげで暗闇でも目が利く。
ここは洞窟。

「くく、これはこれは美味しそうな女がやってきたぞなもし」

私の目の前に、魔物。
手がツル。口が怖い。気持ち悪い。

「残念だけど、あたしはあなたに食べてやられる気はないわ。あなたを倒して、この先に行く。あたしには目的があるから」

勝手に私の口から出る言葉。
やっぱり限定なんだ、この台詞。私に選択権は無いんだ……

「そうかい、そうかい。しかぁし、お前がどうあがこうと俺の双腕からは逃れられないんだなもし。覚悟するんだな」

ふん、私に勝てるかなもし。って、口調移った！？

「うらぁっ！」

魔物が私に向けて大きく右腕を振るう。
私は後ろへ大きく飛んでそれを回避した。敵との間合いを充分に取った私は右手に強く力を込めた。

よし、やってやるか。

「はぁ――――――！」

私は右腕を抱えて全神経をそこに集中させる。

すると私の右腕を覆うように漆黒のオーラがぼんやりと現れた。

右腕を大きく後ろに引いて構え、そのまま投げ付けるように奴へと拳を振りかざす。

「飛痛撃（ラッシュ）――――――！」

私の右腕から放たれた飛ぶ拳撃は目にも止まらぬ速さで宙を駆け、魔物の胴体に華麗にヒットした。

その一撃を受けて吹き飛んだ魔物は洞窟の壁に打ち付けられ、少しの間よろよろと覚束ない足取りで立ち上がろうとする素振りを見せたが、そのまま倒れて気絶した。

私の攻撃による一撃で戦闘はあっけなく幕を閉じた。

「ま、こんなとこかな」

こうなることは見えていたけれど、あまりにも上手くいったので多少顔がニヤける。

私の力は本物だ。これなら魔王だってきっと倒せる。

安堵の気分に浸った私は周りの光景に目を向けた。

死体。

あの魔物に吸い尽くされて絶命した人々が、あちらこちらに点在している。

……もっと早くここに来ていれば、助かった命もあったかも知れない。

でも、そんな考えは意味がない。そんなたられば思考はいらない。

魔王を野放しにしていれば、こんな光景に世界が埋め尽くされる。
それだけは何としてでも止めなければいけない。
もし、この蹂躙された人々の中に私の知っている人が居たのなら、こんなに平常心ではいられなかったと思う。
人は、自分に深く関わっていないことであるのならば、酷く無神経になれる存在なのか。そんなことを考えてしまう。

「はは、あたしってとことん勇者っぽくないなぁ」

独り言を呟く。無論反応してくれる人はいない。
仲間の居ない、勇者。
魔王を倒そうとする勇敢な人間はおらず。ましてや私についてこれるような猛者もいない。
私は、一人でやっていく。

「さて、これからも頑張らないとね」

私は洞窟の出口へ向けて、歩き出した――――

ぶつん。

★☆タイゾーくんの視点☆★

「えええええええええええ！？」

停電した。電力が一時的に供給を遮断された。
おかげで僕の部屋は今、真っ暗だ。え、また消えたの？　ゲーム。

「うわぁぁっ！？」

暗闇の一室にクレアたんの驚いた声が響いた。

「く、クレアたん、大丈夫！？　どこ！？」

僕は部屋の中を駆け巡る。
すると突如、僕の右手に柔らかい物が触れた。
なんだこれ、すんごい良い感触なんだけど。

「きゃあああっ！？　触るなバカぁ！」
「げぶぅっ！？」

暗闇の中、何処からか飛んできたクレアたんの拳を受けて脳が揺れた僕は、気が遠くなりそのまま目の前が真っ暗になった――。
あ、もともと真っ暗だった。

その後、四度目の正直でようやく僕とクレアたんはボスを倒した。

諦めなければ終わりじゃない（後書き）

現実の出来事が元になってます。

や、クレアたんはいませんでしたけどね？

クレアたんの一人称を私にしておけば良かったなと軽く後悔しています。

僕の何でもない過去（1）

「な、なにこれ？」

部屋の中。クレアたんは目を丸くして目前の物体を見つめていた。彼女の手には週刊誌サイズの雑誌が握られていた。

「これはクレアたんが今まで掲載されてきたゲーム雑誌の数々さ！ほら、こっちなんて水着姿の絵があるんだよ！」

僕は雑誌をパラパラと捲ってクレアたんにドヤ顔で見せびらかす。饒舌な口調で。

「それだけじゃないよ、こっちの小雑誌にはクレアたんの初期段階設定絵があるし、この特典テレカになんてクレアたんのメイド姿が」

「ふんっ」

「あああああっ！？　雑誌が真っ二つに引き裂かれた！？」

僕の宝物がクレアたんの両手によってお亡くなりになった。割と分厚い雑誌のはずだったんだけど、クレアたんが引き千切ることによって縦から一気に裂けた。

確か雑誌ってコツを掴めば非力でも真っ二つに出来るはずなんだけど、今のクレアたん、確実に力のみでいったぞ……

「うぅ、悲しいけど……まだまだあるし」

「へぇー？　出してくれるかなぁ、タイゾーくん」

「え」

クレアたんは史上最大級の笑顔を浮かべていた。しかし、なんでだろう。クレアたんは笑っているはずなのだけど、僕の背筋はガタガタと震えが止まらない。
クレアたんの笑顔の奥底に果てしない“闇”が見えるのは気のせいだろうか。

「あたしのことが好きなら、出してくれるよね？」
「ゆ、許してよクレアたん！　いくら大好きなクレアたんの頼みでも、クレアたんは渡せない！」
「いや、もう意味わかんないわよそれ！？」

これ以上クレアたんがクレアたんによって引き裂かれるのだけは死守しなくては。僕は雑誌の数々に覆い被さって必死に守る。

「ていうかお兄ちゃん、そんなに買ってたんだね、ゲーム雑誌」
「バックナンバーを買い漁ったんだよ」

バックナンバーというのは雑誌の過去号のことであって、希望をすれば買うことが出来るものだ。
実は僕はゲーム発売前からクレアたんを知っていた訳ではない。恥ずかしながら、発売してから一ヶ月くらいした頃にミヨがプレゼントとして買ってきてくれたのがきっかけでハマったのだ。
なので僕がクレアたんに目覚めたのは遅めなのだ。
そのため僕はハマると同時に、クレアたんの特集されている過去号を買い漁った、ということである。（正確にはレイド・オン・サタンの特集された号だけど）

「クレアたんという天使に気づくのに遅れた自分自身が恨めしい！」
「ねえミヨちゃん、こいつ殴っていいかな」
「はいどうぞって言いたいんですけど、死ぬと困るのでなるべくな

らやめてください」

クレアたんの発見に遅れてしまった自分を自分で呪いたくなる。

もうこのパターンに疲れたと言いたげな顔をしているクレアたんだった。

「ってか、なんでクレアたんはそんなに僕が嫌いなのさぁ！」

「いや、どこに好きになる要素が……」

僕は泣きそうな顔で絶叫する。クレアたんはまるで渋茶を無理矢理飲まされた時のような顔をしていた。

そんなクレアたんは身を翻すと、びしっと僕に指を差した。

「というか、あんたの愛は重いのよ！　確かにタイゾーがあたしを大好きだってことは伝わったけど、相手も同じくらい自分のことを好きじゃなきゃ、その愛は一方的に通過するだけで嬉しくもなんとも無いのよ！」

「そ、そうだったのか……僕はてっきりクレアたんへの愛は心の臓まで伝わっているのかと思ってたよ」

「よくそこまで前向きに考えられるわね……」

客観的な意見を主張するクレアたん。が、ちょっと顔が赤らんでいるのが萌える。

しかし、なんということだ。僕の思いはクレアたんに全く伝わっていなかったなんて。僕は心に会心の一撃を受けた。

「ま、まあクレアさん。お兄ちゃんを非難するのもその辺にしといてあげてください。お兄ちゃんにもいろいろ事情があったから……」

ミヨが突然話に加わり、僕にフォローを加えた。うぅ、こんなと

きだからこそ妹の優しさが目に染みる。

「そういえばあんた……女の子に酷い振られ方したとかって、言ってなかったっけ？」

クレアたんが腕を組んで思い出したように過去の話を穿り返す。よく覚えていたものだなぁ。

「あー……クレアさん、その話は」

突然の申し出に、ミヨが顔を渋らせる。

「ううん、いいよミヨ。クレアたんがそんなに僕の過去を聞きたいと熱望するのなら、僕は甘んじて自分の恥部をさらけだすよ」

「いや、特に希望はしてないんだけど……」

僕はなるべく思い出したくない過去の出来事に、脳内のカーソルで焦点を当てた。

僕の何でもない過去（2）

僕は何と言いますか、中の下みたいな生活を送っていた。
幼い頃から何か大きな賞賛を浴びせられるような手柄を立てたわけでもなく。
だからといって、不足の事態や悪事をしでかすようなトラブルメーカーだったわけでもない。
喧嘩して、殴り合って、その後に肩を抱き合うような青春には出会ったことがなかった。
学校に一度でも通った人ならば解ると思うけれども、『運動、勉強、笑い』のどれか一つでも取り柄が無いと、自然と空気になりえるような環境だった。
でも空気ってまだ役に立つから良いよね。二酸化炭素とか言われ始めたら最悪だね。
毎日が虚空……とまではいかないけれど、僕の日常は青春なのに灰色であったように思う。
このまま高校生活も終わりかなぁと思いかけていた時だった。

「ねぇねぇ、牧場くんて何してる人？」

唐突に訳のわからない質問をする女子がいた。

「高校生活してる人」
「あはは何それっ、面白ー」

席替えで近くなった席の女の子だった。右から三、前から二番目である僕の席の後ろに位置する子。確か名前は工藤明日香。
女子同士で話しているのを見かけたことが幾度となくあるが、笑

顔が多く、人なつっこい感じの人だったと思う。
白と紺のよくあるうちの学生服に身を包み、首もとまで伸びた少しだけ茶色がかった頭髪。
容姿は……可愛い。あんまり特徴のない顔立ちだけれど、少なくとも女子にあまり免疫のない僕が長時間話していると直ちに惚れてしまうくらいのレベル。

「質問が悪かったね。休みの日に何してるのかなーって思って」
「暇人に対して休みの日に何してるんですかっていう質問は、ある意味では拷問に近い質問だと僕は思うよ」

そう僕が言ってやると彼女はまた「えーなんでー」と大きく笑った。嫌みのない小動物のような笑顔だ。

「じゃあ、暇人なんだね、牧場くんて」
「うん。その通りだけど。面と向かって言われるとなんだかグサッとくるね」

小、中学生までは実は野球をしていた僕だが、高校まで来てやめてしまった。
すると一気に土日が手持ちぶさたになってしまった僕は休日の使い方に苦難した。
とりあえず今言えることは、ゲーム最高。

「うん、私もゲームとかするよ。クラッ○ュバンディクーとか全面クリアできるよ」
「マジで！？」

なんとなしに出したゲーム話題だったけれど、意外なことに彼女は乗ってくれた。女の子ってコアなところでマニアックだったりす

るよね。
そんな何でもないきっかけで始まり、僕は工藤さんと話すことが多くなった。

男子ってのは単純なもので。仲の良い女の子が出来ると日々の生活に張りが出た。
眠いだけでしかなかった起床もすんなりとこなせるようになったし、あまり好きじゃなかった勉強も頑張ってみようという気になった。
あれから僕は彼女とメール交換したりするようになり、日常の細かな出来事なんかを話したりするようになった。
単なるクラスメイトだとしか思っていなかった僕は段々と、彼女に惹かれていった。

大変です。彼女とデートすることになりました。
メールで週末はお互いに暇だねという話をしていた最中に起きた出来事だった。
女の子とデートするのが初めてだったという僕は、普段読まないようなファッション雑誌を開いたりして服装どうこうにも気を遣った。（ミヨにダメだしを食らったりもした）
迎えた当日、工藤さんはベージュのブラウスにチェックのプリーツスカートというとても可愛らしい服装をしていた。
僕はというとブルーのジーンズに上は白地のTシャツ。上から黒いジャケットを羽織るだけというシンプルな格好にした。ミヨがあんまり主張しない方が格好良いよ！　と豪語していたのを参考に取り入れた結果だ。
こういうのは男がリードするものだろうと思っていた僕はなんとか工藤さんを楽しませようと頑張ってみたのだけど、初めてのデートでそううまくいくはずもなく。結果としてはただ街中をぶらぶら

するというなんだか残念な結果に終わった。それでも工藤さんはとても楽しそうに見えた。僕ももちろん楽しかった。

「私、牧場くんのこと好きかも」

ある日、思いもよらない言葉が彼女の口から出た。正確にはメールの内容だけど。

そ、それは何を求めてるんでせうかと脳内に問い掛けたが答えは見つからない。当時の混乱ぶりといったらない。

この異常事態、僕は周りに相談という名の助けを求めた結果、『男なら突き進め！』という結論になった。

うん、なんていうか、僕の中でも思っていることは一つだったのだ。

純粋に彼女が好きでした。好きになるとその人の全てが好き、とはよく言った物だ。もっと仲良くなりたいし、色んなところに行きたい。そんな想いに駆られるようになっていた。

僕は彼女を放課後屋上に呼び出し、決意と覚悟を持って告白した。

彼女の返事は“ごめんなさい”だった。……あれ？

「あっはは！　あいつマジでコクったんだ！」

次の日、教室に行くと嫌な空気が僕の身を包んだ。

皆の視線が、僕に向けられている。しかし、その視線はとても歓迎できるような類の物ではなく、まるで動物園に持ち込まれた珍獣を流し見るような、そんなモノだった。

女子達はくすくすと笑いながら僕にちらちらと目を向けるし、男子達も集団でげらげらと笑っていた。

その笑いの対象が僕であるということは、確かめる必要も無かった。

「……」

僕が辺りを見回した先に、工藤さんがいた。

騒がしそうなギャル風の女子達に囲まれて、申し訳なさそうな顔をしていた。

僕はこの状況が何なのかを理解しようと頭を動かそうとしたけど、上手く動いてくれなかった。

するとそんな僕を前に、一人の女子が歩いてきて言い放つ。

「お疲れー。あ、何が何だか解ってないだろうけど、これってアレなんだ。そ、罰ゲームってヤツ。ぎゃはは！　やっべー、笑い止まんねぇ！」

「え――」

「ごめんねー、怒んないでね？　ちょっとした出来心で始めた遊びなワケ。良い夢見られたっしょ？」

もう一人のよく知らない女子がフォローするように加わった。テンションの高い女子独特の声色が僕の耳を覆う。……遊び？　何が？

「あ、変に思われるとあれだから言っとくけど、アスカはまるでお前のこと好きじゃないから。そこは誤解すんなよな」

目前の女子は吐き捨てるように言い放った。

いや、この状況で考えられるのって、そう多くは無いじゃないか。

要は、あれだろう？　僕って、なんか騙されたってことなんだろう？　女子達のちょっとキツーい、お遊びに。

つまり、工藤さんは別に、僕のことなんて大して好きじゃなかったっていう。別にどうでもよかったっていう。眼中に無かったって、いう。

でも、はは、なんか、その、認めたくない、や。

その後、先生がやってきたことをきっかけに教室は静まりかえったが、氾濫する川の水のように行き場を無くした僕の心はざわついたままだった。

あの日々は、全部まがい物だったのか。元々僕は、彼女と釣り合うような人じゃなかったのか。僕は自分で自分のことを中の下くらいじゃないかなぁとか評価していたわけだけど、本当は下の下だったのだろうか。

そう思うと絶望的に、悲しくなった。

「……むかつくわね、その女」

クレアたんは僕の話を聞き終えると、非常に面白くないという顔をした。

目はまるで魔物を狩る前のように怖く、今までに感じたことのない負の怒気を含んでいた。

「そいつ、どこに居るの？　あたしが文句言ってきてやるわ」

「い、いいよクレアたん。別にそんなことしなくて」

「そういう人の良心を踏みにじるような輩は大嫌いなのよ、あたしは」

知っていた。クレアたんは芯の部分ではとことん正義の心を持った女の子である。強くて、勇ましい。

クレアたんは明らかに不機嫌になっていた。

「そうだよね、君は、弱い物虐めとか、そういうのが、大嫌いな子だもんね。よく知ってるよ。だって……だから……僕は、君が、好きになったんだもん……」
「タイゾー……」
「お兄ちゃん……」

なんかよく見るとミヨまでが涙目みたいになっていた。む、悲しませるつもりは無かったんだけど。傷つくのは僕だけでいいというのに、なぁ。こんなんではお兄ちゃん失格だな。
そんなわけで僕は真実が不確かである三次元よりも、始めから裏切られていると解っている二次元に重点を置くようになった。甘い？　ま、いいじゃん。

僕は二次元だけで、生きていくのさ。

Aの街（1）

「したい」

僕はクレアたんをコントローラーで操作しながら、何気なく呟いた。

「クレアたんと、したい」

「お兄ちゃん、そういう限りなくアウトな発言は慎もうね」

椅子に座ってレイド・オン・サタンをプレイしていた僕に、ミヨはジト目で対応する。

「何を言っているんだよミヨ。僕が言いたいのは、『クレアたんと（心温まるような楽しいことが）、したい』ってことだよ」

「紛らわしいよ！」

「え、なにと？」

「え……それは……べ、別になんだって良いよ！」

何だか知らないけれども、妹が顔中を真っ赤にしていた。なんか変なこと言ったか、僕。

「だってほら、クレアたんとお出かけとかしたいじゃないか」

「その気持ちはわかるけど、危ないよ？」

ミヨが心配気な顔で言及する。確かに、ゲームの中から飛び出したなんて女の子が街を歩いていて、突っ込まれたりしたら厄介である。

ただでさえクレアたんは目立ちそうであるし。外でトラブルが起

きたりするとまずい。

「……良いことを思いついた！」

僕は立ち上がる。そうだ、クレアたんと外をエンジョイする方法……その方法を考えていた僕は、一つの妙案に行き渡る。

僕は身を翻してミヨを見つめ、思いを口にすることにした。

「ミヨ、お前――最初にクレアたんを見た時、自分が何て言ったか……覚えているか？」

僕の言葉に不意を突かれて「えっ？」と驚くミヨは思考を働かせてしばしの間悩む。すると答えが解ったのか、掌に握り拳をぽんと置き、閃いたような顔をした。

「え、えっと。デリ○ル？」

「そっちじゃねぇよ！」

正解！　と言おうとした僕は勢い余ってずっこけそうになった。我が妹ながらしっかりしているようでどこか抜けている。

「コスプレイヤー……そう言ったろう？　つまりだ、初対面の人にとって、クレアたんはコスプレイヤーに見えるというわけだ」

「ああ、なるほど……。でも、それがどうかしたの？」

ミヨはまだ理解していないようだった。僕は話を続ける。

「まだ解らないか？　つまり、クレアたんをコスプレイヤーがいても不思議じゃないところに連れて行けば……」

「あ――」

ミヨもようやく僕の思惑に気づいた模様だった。
そう、木の葉を隠すなら森の中、ってね。コスプレイヤーを隠すなら……そう、アキバだ！　あそこならばクレアたんを連れて行ってもおかしくないはずだ！　我ながらなんという奇策！　自分の有能ぶりに、思わず涙すら出てくるってものだ。
クレアたんと外出するという手筈は整ったわけである。

「えー……それって、大丈夫なのかなぁ」
「大丈夫だよ。お兄ちゃんの案だぞ？」
「うん、だから心配なんだけどね」

ミヨは『またこの馬鹿兄貴は……』みたいな顔をしていた。くそう。

「服は……そのままでいいの？」
「そのままじゃなきゃ、クレアたんがコスプレイヤーを装うことが出来ないじゃないか」
「まあ、そうだねぇ」

ゲームの世界の住人を、この世に連れ出す。考えてみると僕もちょっと不安になってしまった。クレアたん、人殺したりしないだろうか。
いや、その点に関しては大丈夫か。クレアたん、手加減するの上手いし。現に僕が死んでいないのがその証拠である。クレアたんが本気だしたら僕は恐らく塵と化すであろう、うん。

かくして、クレアたんと外に遊びに行こう作戦は決行された。

Aの街（2）

僕とミヨ、そしてクレアたんは三人揃って電車に乗り込んでいた。
理由はもちろん、アキバへと行くためである。
クレアたんはまず外の世界が余りにも自分の知っている世界と違うことに驚いていた。
レイド・オン・サタンの世界は中世ヨーロッパのような木造、石造りの建物が建ち並んでいる。
それに比べたら住宅街が所狭しと建ち並ぶ僕の世界は彼女にとって幾分か不思議であろう。
道行く人々も皆一様にクレアたんをじろじろと見ていた。そりゃまあ、いきなり見かけたら驚くよなぁ。
まず銀水色というべきサラサラの長髪の時点で目立つというのに、服装も黒い布服を着込み、その上にまるでピッコロ大魔王が着てそうな白いローブだものなぁ。あのとんがった肩当てみたいなのは無いけど。ある意味レインコートっぽい衣装と言えなくもないかな、無理か。
というわけで、駅に辿り着くまでに大量の人から視線を浴びるわ、着いてからも目立つわで、目的地へ行くまでが鬼門であった。

（……なんか、すんごい見られてるわね）

電車内でクレアたんがぼそっと呟いた。
それもそのはず。椅子に座っている人、立っている人、皆がそれぞれこっちに視線を向けたり戻したりしている。何、この居たたまれない空気。……そういや、こんな感じの雰囲気、前にもあったなぁ。

（お兄ちゃん……やっぱり無謀だったんじゃないかな）

（いや、大丈夫だよ。変な人がいるとしか思われてないからさ）
（それが嫌なんだよう！）

ミヨは早くも帰りたそうだった。頑張れ妹よ、人はこうやって成長していくのだから。
僕達は周りの視線という強敵の攻撃をなんとかかいくぐり続け、ようやく目的地へと辿り着いた。
駅構内を渡り、改札口を通り、外の世界に触れた僕は言いしれぬ達成感に包まれた。

「着いたー！」
「ここが……アキバ」

思わずガッツポーズをする僕。クレアたんは辺りをきょろきょろと見回していた。
さすがに人ごみが凄い。点在する電気系統のショップには大量に人が入っているのが見える。
それと、さっきまでよりもある意味で熱意のある視線に包まれた気がするが、気にしないでおこう。
僕らはとりあえずぶらぶらと歩き、ゲームショップに入った。

「ほら、クレアたんのゲームがあるよ」
「やっぱり自分が写ってるってのは変な気分ね……」

クレアたんはゲームの箱を手に取る。でかでかと表記されたゲーム名の周りには各々のキャラクターが描かれている。その中にはもちろんクレアたんの姿もあった。
僕は辺りを見回す。するとミヨが物珍しそうにフィギュアコーナーを眺めていた。全身が漆黒で統一された長い刀を持つ女のフィギュアが佇んでいた。

お値段は一万円しないくらいである。思うのだけど、こういうフィギュアって一体一体手作りなのだろうか。どうやってこんな複雑な形を大量生産するのだろう。

「すごいねぇこれ、物凄い細かく作ってあるんだね。そういえばお兄ちゃん、部屋にフィギュアって飾ってないよね？」

「クレアたんのフィギュアはまだ発売されていないんだ。出たらそれはもう、今すぐにでも！」

「この世界は謎だらけだわ……」

感嘆の声を上げるミヨとは逆に、クレアたんは頭を抱えていた。恐らく現実逃避の一種じゃないかと思う。

まあ、逆に僕が二次元の世界に行ったりなんてしたら、悩むかな。……大喜びする気がするんだけれども。

……僕は三次元に絶望したみたいな心を抱えておきながら、なんで三次元になったクレアたんに大喜びしてるんだろう。

いや、クレアたんは元々二次元の世界の人なのだから、正確に言えば2．5次元なのではないか？　そこんとこ、どうなんだろう。

僕らは店を出た。通りをぶらぶらと歩き、次はどこへ行こうかな、なんて考えていた時のことだった。

「すみません！　余りにも素晴らしいコスプレなもので！　その、写真撮ってもよろしいでしょうか！？」

カメラを手に持った青年が僕らに声を掛けてきた。緑色のバンダナを頭に巻き、少し小太りな脂ぎった顔。ヨレヨレに草臥れた衣服。昨今では珍しいとされるいかにもなオタクだった。

どうやらクレアたんの写真を撮りたいらしい。素晴らしいコスプレってか、まさかの本人だものなぁ。カメラマンが見逃すはずもな

い。周りに居る人も「あれはレベルが高い！」みたいな表情をしているし。

「ね、お兄ちゃん、まずいよ！」

どうしようかと悩んでいた僕だが、気づくと服の裾をミヨがちょいちょいと引っ張っていた。

「え？」

「ほら、クレアさんの証拠、残っちゃうじゃん！　写真なんて撮られたら！」

「あ――」

やべぇ。なんでそれに気づかなかったのか。

この世界に存在しない人物の写真が形となって残るって、よく考えてみると確かに良くはない。

それが原因でとんでもないトラブルに巻き込まれるという可能性も、考えられなくはない。

「お願いします！　一枚だけで良いんで！」

「えっと……」

僕はカメラマンを前にたじろいでいた。……どうする？

なんか周りにもカメラ持った人が集まってきてるし。このままだと明らかにまずい。

「クレアたん、逃げよう」

「えっ？」

僕はクレアたんの手を握って走り出した。うわぁ、クレアたんの

手、暖かいなりぃ……じゃなくて。
ミヨの方にも気を配り、僕達三人は逃走を図った。
この人ごみである。上手く人の間をくぐり抜けて逃げれば振り切れるはずだ。
前に見える曲がり角を次々に曲がり、僕達は裏路地のような場所へと逃げ込むことで難を逃れた。

「な、何だったのよあれは……」

僕らはなんとかカメラマンから逃げ果せた。
僕とミヨはぜーはーと大きく息をついていたが、クレアたんはまるで疲れていないようだった。

「やっぱりクレアさんが目立つとまずいね。……逆に危ないんじゃないかなぁ、アキバ」
「僕もこのチョイスに失敗を感じてきたよ……」

二人してアキバに出かけたことを後悔し始める。なんという浅はかな考えだったのだろうか。
周りを見る。……裏路地。裏路地だけあって、薄汚い。建物の間に位置しているだけあって狭く、所々にゴミが落ちている。
華やかな都会の裏側には、こうした場所があるのは当然だ。

「これからどうしようか？」
「うーん、そうだなぁ」

ミヨが問う。今後の行き先に不安を感じているのだろう。まあ、あんなことがあった後だしなぁ。
そろそろお腹がすいた。飲食店にでも入ろうか――そんなことを考えていた僕に、また難は訪れた。

「やあオニーちゃん。ちょっとお願いあるんだけどさぁ」
「俺達にお金貸してくんないかなぁ？」

僕らに二人の人間が近づいていた。お兄系の服に身を包んだ黒髪の短髪男に、ホスト風味の長髪の男。
彼らの発言を聞いた限り、僕達にとって良い人というわけではなさそうだ。
――オタク狩り。それに近い人種だろう。アキバのオタクをターゲットとするカツアゲ野郎ってヤツだ。

……僕のことをお兄ちゃんなんて呼ぶのは、ミヨだけでいいというのに。

「お金無いんだったら、そっちの二人を預けてくれてもいいよ？俺としてはそっちの方が……暇なんだよねぇ」
「――っ！」

短髪男の心ない発言に、ミヨが僕の陰に隠れる。……ミヨを怖がらせやがって。

「ミヨとクレアたんに手ぇ出すな！」

自分でも信じられないくらいの怒号が出た。――若干足は震えていたけれども。恥ずかしい。
しかし、中学生であるミヨに、コスプレイヤー（に見える）クレアたんに手を出すか。悪趣味な奴らめ。

「羨ましいなぁ、両手に花じゃん、ボク」
「う！」

ホスト風の男に胸倉を捕まれた。くっそ、退かないぞ、僕は。せめて二人がどこか遠くへ逃げるまでは……

「ねぇ、ミヨちゃん。あたしってさ、目立たなければいいんだよね？」

「へ？　あ、ええ。そうですね」

「ここって、目立たないよね？」

「えっと……まぁ、目立たないですね」

何やらクレアたんとミヨが後ろで話していた。と思った途端、僕を掴んでいた男が吹っ飛んだ。

……あ、そうか。僕、心配する必要ないじゃん。

吹っ飛ばされた男はそのまま強く建物の壁に全身を強打し、物言わぬ体となった。

「！？」

いきなりホスト風の男が吹き飛んだことに驚きを隠せず振り向いた短髪の男。

しかし、気づくとその後ろに一瞬でクレアたんが移動していた。見るとクレアたんの右手首から指先までにどす黒い謎のオーラが立ちこめていた。

「忌是通（スタン）」

そのままクレアたんが手刀を短髪男の首にトンと軽く当てる。すると男は目の光を失い、全身の力を失ったようにその場に倒れた。

さっきまで威勢の良かった男二人組は、一瞬の内に喋ることも動くことも出来なくなっていた。

「さ、離れましょうか」

クレアたんはニヤリと笑い、淡々と言い放つ。僕とミヨはしばらくその光景に呆然としていたが、頭が認識に追いつくとクレアたんに付いていくように裏路地を後にした。

Aの街（3）

「クレアさんて、カッコイイ！」

ミヨが目の色を輝かせながら喋る。

僕達はファミレスに来ていた。お腹がすいたからというのと、落ち着きたかったからだ。

せっかくだからここでしか味わえないようなお店にしようかと考えたが、メイド喫茶はあまりにも飲食の値段が高かったので、やめた。

「私も武道とかやって、強くなれないかなぁ」

「やめとけって。クレアたんは人の域を超えた強さだからね？」

ミヨが興奮気味に言う。僕はそんな妹を引き留めに掛かる。徒労に終わる道へ妹を進ませてはいけない。

「クレアさんみたいなお姉ちゃんが欲しかったなぁ……」

「あたしもミヨちゃんみたいな妹が欲しいな」

対面して座っているミヨとクレアたんは二人してにんまりと笑う。とっても良い笑顔だ。

「お兄ちゃんも格好良かったよ。さっきの時」

「そうね、タイゾーにしては中々上出来だったわね」

二人の笑顔はいつの間にか僕に向けられていた。え？　僕、そんなに良かった？

困るなぁ、でへへ。クレアたんに好かれ、実の妹にも好かれ。こりゃあ参ったぞ、これだからモテる男は困る。

「もしかして……クレアたん、僕に惚れた？」

「惚れんわ！」

クレアたんはそこ勘違いすんな！　という顔で突っ込んだ。やっぱ、そこはダメなんだ……僕は冥界の死神に死の宣告をされたようにブルーになった。

「ちょっと僕、トイレに行ってくるね」

そう言ってクレアたんとミヨを残し、席を立つ僕。

男子用トイレで用を足し、席に戻ろうと店内を歩いていた――そのときだった。

店内の一席に、見知った顔を見つけた。

「え――」

目線の先に居たのは、工藤さんだった。工藤明日香。僕のクラスメイトであり、僕が初めてデートをした女の子であり……初めてこっぴどく騙された、女の子だった。

工藤さんは他二人の女の子と一緒に席に座っており、仲良さそうに喋っている所だった。

そんな彼女を見つめていた僕。不意に視線を逸らした工藤さん。

――僕達二人、目が合った。

二人して固まる。……なんで、彼女がこんなところに？　あれかな。もしかして、彼女達は物珍しいアキバを散策しに来たんだろうか。詳しい事情は解らない。

工藤さんも物凄く驚いた表情をしていた。他に座っていた女の子

にはばれていないようだったが。
……僕は彼女から視線をそっと外す。やたらにもやもやした気分になった。あーあ、今まで楽しい気分だったのに。
僕は平常心を保ち、元の席に戻る。クレアたん達におかえりと出迎えられた。

その後、しばらく僕達は楽しい会話を繰り広げ、店を後にした。帰り際、彼女の方は振り返らなかった。
入り口で代金精算を済まし、僕らは店を後にする。

「牧場くん！」

お店を出て、数歩。突如後ろから……懐かしい声が響いたのだった。

「あ――工藤、さん」
「そ、その……謝らせて欲しいの！」

いきなり一人で店を飛び出してきた工藤さんは、くしゃくしゃに歪んだ顔になった。悲痛な表情で叫ぶ。
ミヨとクレアたんは何事かと驚いていたけど、後ろの方でそっと話を聞いていた。

「その、あの、許してもらえないかも知れないけど……。あれって、あの罰ゲームって、私の友達が考えたことで！　私、本当はやりたくなんてなかったんだけど、どうしても断れなくって――、牧場くん、学校にも来なくなっちゃったし……」
「……」

工藤さんは下を向いて話を続ける。その表情は重く、見ているこ

っちが痛々しくなるような感じだった。
ちらっと見ると、クレアたん達は遠く離れた場所から僕らを見守っていた。どうやら事情を察してくれたみたいだ。
「皆が結果を報告しろって言うから、恥ずかしくて断っちゃったけど、私、本当は――」
「いいよ」
僕は彼女の言葉を遮るように呟く。
「もう、いいよ。解ったから」
僕は努めて優しい表情を出すように頑張った。彼女は涙目でこっちを見ていた。
……ああ、彼女もずっと心を痛めていたのか。いやだねぇ、すれ違いってのは。ほんと、嫌になる。
「でもごめん、もう工藤さんとは普通に付き合えないと思う」
「あ――」
僕は真面目な顔で、それだけははっきりと告げる。
工藤さんの表情が瞬時にして曇ったけれど、僕は怯まずに言葉を続ける。
「別に工藤さんのことが嫌いってワケじゃないんだ。でも、僕にはもう、好きな人が居るんだ」
「……そっ、か」
「うん、その人は、強いんだ。凄く。大きな目標があって、その信念に向けて頑張っているからだと思う。僕には真似できそうもない、そんな――憧れるような人だ。僕は今、その人しか見ることが出来

ない」

僕はありのままの自分の想いを吐露した。偽りはない。過小表現、誇大広告無しの、僕のあるがままの答えだ。

「だから、工藤さんも気にしないで欲しいんだ。僕は今、元気だから。学校も……そのうち、行こうと思うし」

「あ……」

僕の話を聞いて、工藤さんの表情に少し明かりが灯った。やっぱり、彼女には笑っている姿が似合う。

「また、学校でね」

「うん、ばいばい。またね」

工藤さんは目に涙を貯めながら、小さく僕に手を振る。良かった。これできっと……僕と彼女のわだかまりは消えたんだ。

僕は笑顔で工藤さんに手を振り、その場をゆっくりと離れると、遠くで待っていたクレアたん達に合流し帰路についた。

『バッカじゃないのアンタ（お兄ちゃん）！？』

帰宅後。「帰ったら話すよ」と二人に言っていた僕は、工藤さんとの事のあらましを語った。

するとクレアたんもミヨもありえないと言った感じで、僕を非難するのだった。

「な、なんでそんな二人して……」

「良いじゃん、付き合っちゃえば良かったじゃん！　何が悪かったのさ！」

「そうよ、せっかく上手く話がまとまりそうだったじゃない！　アンタ究極の馬鹿なの！？」

ミヨとクレアたんの口から罵声の雨が飛ぶ。いや、愛のある罵声だけども。

二人の言い分は工藤さんと付き合えば良かったのに、という物だった。

しかし、そんなことはできない。中途半端な気持ちで付き合うなんて、それこそ失礼だ。相手に申し訳ない。

「いや、だって今の僕は、クレアたん一筋だからさ！」

僕は親指を立ててニッと笑ってみせる。すると二人の顔が呆然と真顔になり、汚物を眺めるような物に変わった。

「クレアさん、一緒にお風呂にでも入りませんか」

「良いわね、そうしよっか」

急に笑顔になったミヨとクレアたんは顔を見合わせると、そそくさと僕の部屋から退室してしまった。

「え、ミヨ？　ちょっと、クレアたん。どうしたのさ！　ねぇったら！？」

叫ぶ僕。しかしその声に二人が反応することはなかった。

あれ――僕――なんだか、すごいやっちまった感があるぞ。うん、大丈夫か？　なんか、人生における重大な選択肢を間違えてしまったみたいな、この不安感は一体何だろう。

その後結局、僕の胸に去来する虚無感はしばらく続いたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9670u/

なんかゲームしてたら武闘家少女が出てきちゃった

2011年11月17日18時02分発行